

佐藤綾野・中田勇人 共著

## 『国際金融論15講』 正誤表

2025年3月 新世社

### 第2講

p. 28 下から6行目

修正前：約 336 兆円であり， …

修正後：約 **328 兆円** であり， …

p. 28 下から3行目

修正前：プラスになっていますがわかります。

修正後：プラスに**なっていることが**わかります。

p. 32 Active Learning

《理解度チェック》

修正前：□2 日本企業がニューヨークのビルを購入した場合， …

修正後：□2 日本企業がニューヨークのビルを **1億円** で購入した場合， …

修正前：□3 中国の子会社から日本の本社へ利益の送金があった場合， …

修正後：□3 中国の子会社から日本の本社へ利益の送金 **3000万円** があった場合， …

### 第3講

p. 39 下から6行目

修正前：開放経済下の一国の総供給は，国内で生産された GDP とともに…

修正後：開放経済下の一国の総供給は，国内で生産され**分配される** GDP (**つまり国民所得 Y**) とともに…

p. 46 4行目

$$\text{修正前: } Y = \frac{1}{1-c_1+m_1} (c_0 - m_0 + \bar{I} + \bar{G} + \overline{EX})$$

$$\text{修正後: } Y = \frac{1}{1-c_1+m} (c_0 + \bar{I} + \bar{G} + \overline{EX})$$

p. 46 6行目

$$\text{修正前: } \Delta Y = \frac{1}{1-c_1+m_1} (\Delta \bar{I} + \Delta \bar{G} + \Delta \overline{EX})$$

$$\text{修正後: } \Delta Y = \frac{1}{1-c_1+m} (\Delta \bar{I} + \Delta \bar{G} + \Delta \overline{EX})$$

p. 46 Active Learning

《理解度チェック》

修正前: □2 …のときの均衡国民所得はいくらでしょうか。

修正後: □2 …のときの総需要 (および均衡国民所得)はいくらでしょうか。

修正前: □3 …のときの均衡国民所得はいくらでしょうか。

修正後: □3 …のときの総需要 (および均衡国民所得)はいくらでしょうか。

## 第4講

p. 52 4-5行目

修正前: 投資家は債券を買うよりも銀行に預金をした方が多くの利益が得られます。

修正後: 投資家は債券を買うよりも現金で保有した (あるいは銀行に預金をした) 方が流動性を含め大きなメリットが得られます。

p. 52 5行目

修正前: このような場合、債券需要が減少するので債券価格は下がり、同時に…

修正後: このような場合、債券需要が減少すると同時に…

p. 52 7行目

修正前: 債券の金利*i*が上昇すると、債券需要が上がり債券価格は上昇し、貨幣需要は…

修正後: 債券の金利*i*が上昇すると、債券需要が上がると同時に、貨幣需要は…

p. 62 Active Learning

《調べてみよう》

修正前：[1] …と日本の貨幣量（M3）の推移を…

修正後：[1] …と日本の貨幣量の推移を…

## 第5講

p. 75 5.4節の12行目

修正前：…が生産者通貨建て（PCP）で価格を設定した場合、

修正後：…が生産者~~国~~通貨建て（PCP）で価格を設定した場合、

## 第7講

p. 100 下から6行目

修正前：…ということ意味します。

修正後：…ということ~~を~~意味します。

p. 104 図表 7-4

2行目の「単価」を「~~単~~位」に修正（左右とも）。

p. 116 下から3行目

$$\text{修正前：} 1 + \frac{\Delta S}{S} = \frac{1 + \frac{\Delta P}{P}}{1 + \frac{\Delta P^*}{P^*} \left(1 + \frac{\Delta \theta}{\theta}\right)}$$

$$\text{修正後：} 1 + \frac{\Delta S}{S} = \frac{1 + \frac{\Delta P}{P}}{\left(1 + \frac{\Delta P^*}{P^*}\right) \left(1 + \frac{\Delta \theta}{\theta}\right)}$$

## 第9講

p. 149 2-4 行目

「そこで本講では、…を導出します。」を削除。

p. 150 11 行目の見出し

修正前：■DD 曲線

修正後：■DD 曲線と FF 曲線

p. 150 12 行目

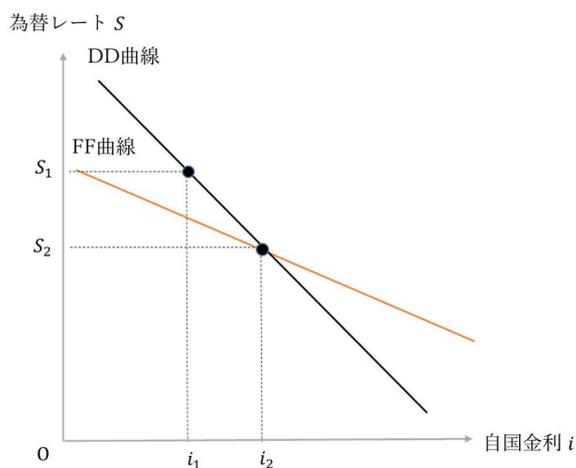
修正前：DD 曲線を導出した図です。

修正後：DD 曲線と FF 曲線を描いた図です。

p. 150 図表 9-7

修正前：図表 9-7 DD 曲線の導出

修正後：図表 9-7 DD 曲線と FF 曲線の導出



p. 151 12 行目の下に以下を挿入

FF 曲線は外国債券市場の均衡を満たす自国金利と為替レートの組み合わせで、やはり右下がりになります。これは自国金利が上昇したとき外国債券需要は配分比率  $f$  が低下することで減少します。このとき (9.9) 式を満たすためには、為替レートの増価（低下）によって自国通貨建て外国債券供給  $S \cdot F^s$  ( $F^s$  は一定) が減少する必要があります。このとき為替レートの増価によって総資産額  $W$  が減少するので外国債券需要も減少しますが、 $S \cdot F^s$  のほうが大きく減少します。

**p. 151** 13行目

「MM 曲線と同様に、」を削除。

**p. 151** 16行目の末尾に以下を挿入

これは FF 曲線も同様です。

**p. 151** 下から 11 行目

修正前：…為替レートが減価（増加）すると

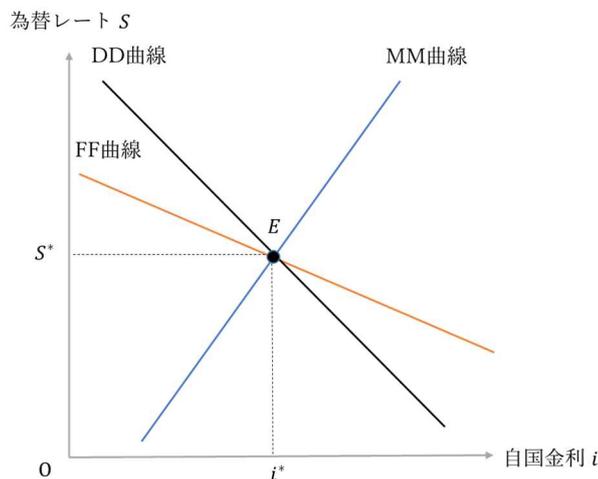
修正後：…為替レートが減価（**増価**）すると

**p. 151** 下から 5 行目から最終行

修正前：MM 曲線と DD 曲線の交点では...の組み合わせになります<sup>13</sup>。

修正後：図表 9-8 では MM 曲線と DD 曲線、FF 曲線の交点 E が自国の均衡金利  $i^*$  と均衡為替レート  $S^*$  の組み合わせになります<sup>13</sup>。また DD 曲線の傾き（の絶対値）は FF 曲線よりも必ず大きくなります。なぜなら、MM と FF の両曲線の右側では貨幣と外国債券の超過供給が生じていますが、資産市場のワルラス法則を踏まえると、このとき自国債券では超過需要が生じます。そのため自国債券市場の均衡を示す DD 曲線がこの領域を通ることはないからです。

**p. 152** 図表 9-8



**p. 152** 2行目

修正前：DD 曲線がシフトして…

修正後：DD 曲線、**FF 曲線**がシフトして…

p. 154 6行目

修正前：MM 曲線だけが

修正後：MM, DD, FF 曲線が全て

p. 155 2行目

修正前：しかし

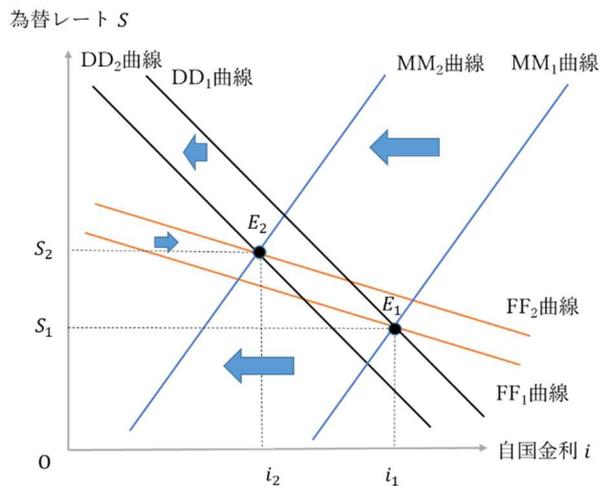
修正後：また

p. 150 4行目

修正前：上昇しなくてはならない

修正後：上昇する

p. 156 図表 9-12



p. 156 3行目の末尾に以下を挿入

一方、 $W$  の増加によって自国債券と外国債券に対する需要が増加するので、同様に考えると DD 曲線は左に、FF 曲線は右にシフトします。

p. 156 5行目

「MM 曲線の左シフトによって」を削除。

p. 156 下から 3 行目

修正前：よって、外国債券に…

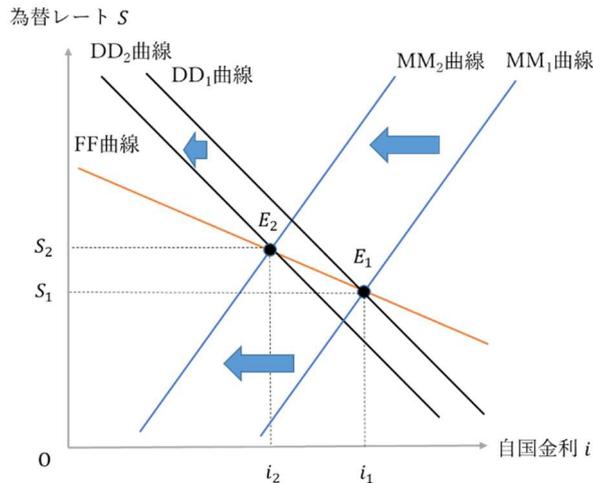
修正後：よって、自国通貨建ての外国債券に…

p. 157 2-4 行目

修正前：つまり，ここでは…が働いているのです。

修正後：一方，自国金利の低下によって，自国債券の配分比率は低下します。つまり，民間総資産  $W$  の増加を伴う貨幣量の増加は他の資産の配分比率を変えることで，為替レート  $S$  が減価するというメカニズムが働いているのです。

p. 156 図表 9-14



p. 158 6-9 行目

「図表 9-10，図表 9-12 では，…を分析しましょう」を削除。

p. 158 10 行目

修正前：供給量が増加するので，

修正後：供給量が増加すると，

p. 158 11 行目

「図表 9-13 で示したように，」を削除。

p. 158 下から 3 行目の末尾に以下を挿入

ただし FF 曲線は変化しません。

p. 159 1-2 行目

修正前：自国債券の供給…ならないからです。

修正後：公開市場操作では投資家の総資産  $W$  と外国債券市場が一定の下で、国内貨幣市場と自国債券市場の均衡を回復するため、為替レートよりも自国金利によって調整するためです。

p. 159 3-6 行目

修正前：為替レート  $S$  の減価幅は…増加しないためです。

修正後：為替レート  $S$  は減価しますが、減価幅がより大きいか否かはケースによって異なります。

## 第 10 講

p. 163 図表 10-1

第 1 列で「固定」に分類されているのは「①独自の法定通貨が放棄された為替相場制」のみだが、正しくは「①独自の法定通貨が放棄された為替相場制」および「②カレンシー・ボード制」の 2 種類。

p. 163 図表 10-1

第 4 列の「主な採用国」で、「②カレンシー・ボード制」と「⑥クローラ型制度」の両方にドミニカが掲載されているが、正しいのは「②カレンシー・ボード制」である。

p. 176 脚注 16 の 2 行目

修正前：…自国通貨安を目指しているはずなので

修正後：…自国通貨安を目指しているはずなので

## 第 11 講

p. 195 2 行目の数式の下に次の式を追加

追加：あるいは、 $i = \frac{c_0 + G}{a} + \frac{c_1 - 1}{a} Y$ ,  $c_0 > 0$ ,  $a > 0$ ,  $0 < c_1 < 1$

p. 195 3行目

修正前：…とき、上の傾き $\frac{-a}{1-c_1}$ が負であることがわかり、…

修正後：…とき、上の傾き $\frac{c_1-1}{a}$ が負であるので、…

p. 195 10行目

$$\text{修正前： } \frac{\Delta Y}{\Delta i} = \frac{\frac{\partial I}{\partial i}}{1-\frac{\partial C}{\partial Y}}$$

$$\text{修正後： } \frac{\Delta i}{\Delta Y} = \frac{1-\frac{\partial C}{\partial Y}}{\frac{\partial I}{\partial i}}$$

p. 195 13行目

$$\text{修正前： } \frac{\Delta Y}{\Delta i} < 0$$

$$\text{修正後： } \frac{\Delta i}{\Delta Y} < 0$$

p. 196 Active Learning

《Discussion》

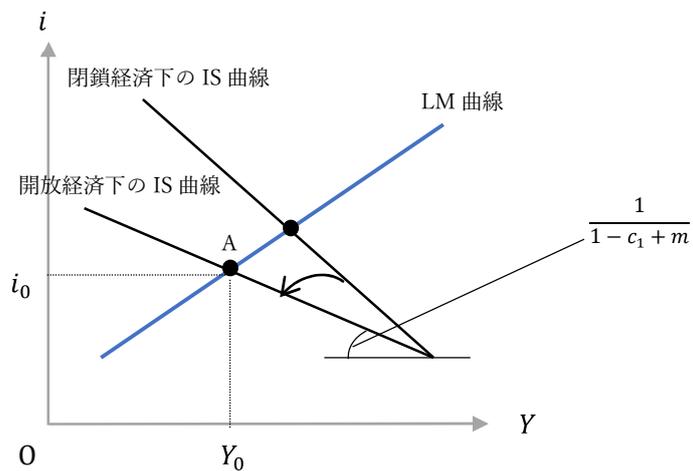
修正前：…単独で発動する場合と比較して、国民所得や金利は…

修正後：…単独で発動する場合と比較して、均衡国民所得や均衡金利は…

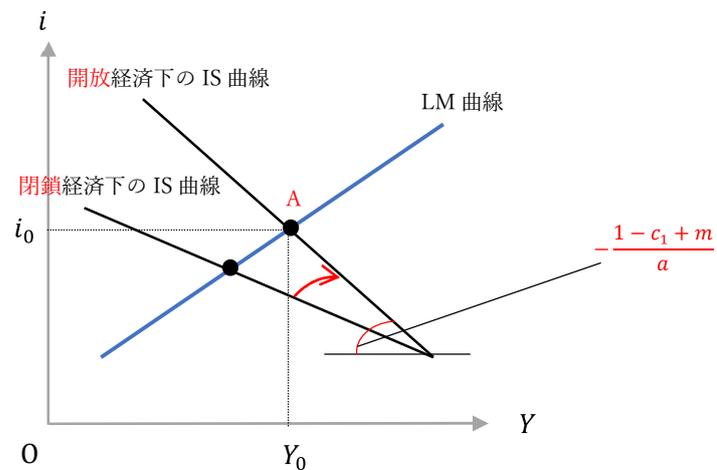
## 第 12 講

p. 200 図表 12-1

修正前：



修正後：



p. 200 3 行目

修正前：輸入性向分だけ小さくなるのが特徴です（本講末の補論参照）。

修正後：輸入性向分だけ（絶対値で）大きくなるのが特徴です（本講末の補論参照）。

p. 208 下から 10 行目

「とします。また経常収支関数は、以下のように特定します。」を削除。

p. 208 下から 5 行目

$$\text{修正前： } Y = -\frac{a}{1-c_1+m}i + \frac{1}{1-c_1+m}(x_f Y^f + x_s S)$$

$$\text{修正後： } i = -\frac{1-c_1+m}{a}Y + \frac{1}{a}(c_0 + x_f Y^f + x_s S)$$

p. 208 下から 4 行目から 2 行目

修正前：となり、(12.A) 式は、縦軸  $i$ 、横軸  $Y$  とする平面では、傾き  $-\frac{a}{1-c_1+m} < 0$  の直線と  
なることがわかります。つまり開放経済下の IS 曲線は右下がりになります。また  
(12.B) 式から、為替レート  $S$  が減価（上昇）したとき、国民所得が増加すること  
もわかります。

修正後：となり、(12.B) 式は、縦軸  $i$ 、横軸  $Y$  とする平面では、傾き  $-\frac{1-c_1+m}{a} < 0$  の直線と  
なることがわかります。つまり開放経済下の IS 曲線は右下がりになります。また  
(12.B) 式から、為替レート  $S$  が減価（上昇）したとき、国民所得が増加すること  
もわかります。

p. 209 6 行目

$$\text{修正前： } \frac{\Delta Y}{\Delta i} = \frac{\frac{\partial I}{\partial i}}{\left(1 - \frac{\partial C}{\partial Y} - \frac{\partial CA}{\partial Y}\right)}$$

$$\text{修正後： } \frac{\Delta i}{\Delta Y} = \frac{\left(1 - \frac{\partial C}{\partial Y} - \frac{\partial CA}{\partial Y}\right)}{\frac{\partial I}{\partial i}}$$

p. 209 8 行目

$$\text{修正前： } \frac{\Delta Y}{\Delta i} < 0$$

$$\text{修正後： } \frac{\Delta i}{\Delta Y} < 0$$

p. 209 9 行目

修正前：となります。またの傾きになります。

修正後：となり、この傾きは負になります。

p. 209 12行目

$$\text{修正前: } \frac{\Delta Y}{\Delta S} = \frac{\left(1 - \frac{\partial C}{\partial Y} - \frac{\partial CA}{\partial Y}\right)}{\frac{\partial CA}{\partial S}}$$

$$\text{修正後: } \frac{\Delta Y}{\Delta S} = \frac{\frac{\partial CA}{\partial S}}{\left(1 - \frac{\partial C}{\partial Y} - \frac{\partial CA}{\partial Y}\right)}$$

## 第13講

p. 213 下から7行目

修正前: …右 (あるいは上方) シフトさせます。

修正後: …右 (あるいは上方) にシフトします。

## 第15講

p. 243 10行目

修正前: 米ドル

修正後: USドル

p. 244 5行目

修正前: 米ドル

修正後: USドル

p. 244 11行目

修正前: 米ドル

修正後: USドル

p. 249 14行目

修正前: …これらの諸要因は最適通貨 (OCA) 基準とも呼ばれ,

修正後: …これらの諸要因は最適通貨圏 (OCA) 基準とも呼ばれ,

p. 255 脚注 13 の 1 行目, 2 行目

修正前 : 米ドル

修正後 : USドル

p. 256 17 行目

修正前 : …スケジュールを提案されました。

修正前 : …スケジュールが提案されました。

p. 259 3 行目

修正前 : 米ドル

修正後 : USドル